



**Data**

監督：瀬々敬久  
 プロデューサー：坂ロー直/石毛栄典/浅野博貴/藤川佳三  
 脚本：相澤虎之助/瀬々敬久  
 出演：木竜麻生/東出昌大/寛一郎/韓英恵/渋川清彦/山中崇/井浦新/大西信満/嘉門洋子/大西礼芳/山田真步/嶋田久作/菅田俊/宇野祥平/嶺豪一/篠原篤/川瀬陽太

## 👁️👁️ みどころ

ルース・ベネディクトの『菊と刀』は有名だが、『菊とギロチン』とは一体ナニ？ 菊は女相撲に入ったヒロイン花菊、ギロチンはアナキスト集団のギロチン社のこと。しかして、関東大震災が起きた1923（大正12）年当時の両者の地位は？ 社会的嫌悪度は？

一方では『64 —ロクヨン— 前編』（16年）『64 —ロクヨン— 後編』（16年）で商業映画を大ヒットさせ、他方では『ヘヴンズ ストーリー』（10年）でインディーズ大作を世に問うた瀬々敬久監督が、80年代に始まった彼の「夢想」を本作で炸裂！ 花菊の「強くなりたい」、アナキストの「社会を変えたい」という夢は、どこから生まれ、どう育まれ、どう散っていったの？

それを本作で確認しつつ、今を生きる若者がいかなる夢を持っているのか、持つべきなのかについて、しっかり考えたい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■ 『菊と刀』ならぬ『菊とギロチン』とは？ ■□■

ルース・ベネディクトが戦時中の調査研究をもとに1946年に出版した『菊と刀』は、「義理・恥・恩」等の日本文化固有の価値を分析したもので、アメリカ文化人類学史上最初の日本文化論と言われている。そこでは、「菊の花が象徴しているのは、自由を自制する戦中および戦前の日本人の生き方のことである。また刀は、狭い意味では刀の輝きを保たねばならない武士の義務のことであり、広い意味では自己責任をまっとうしようとする日本人全般の強い意志のことである。」とされている。しかして、本作のタイトル『菊とギロチン』とは一体ナニ？

菊は、貧しい農家に嫁いだものの、夫の定生（篠原篤）のあまりの暴力に耐えられず家出し、岩木玉三郎（渋川清彦）が主催する女相撲一座「玉岩興行」に加わった女性、花菊ともよ（木竜麻生）のこと。そして、ギロチンとは、1923（大正12）年9月1日に発生した関東大震災の前年である1922（大正11）年に、埼玉県の小作人社で意気投合した、中濱鐵（東出昌大）と古田大次郎（寛一郎）の2人が中心となって結成した「ギロチン社」のことだ。18世紀中頃に見世物興行として生まれた女相撲は、1920年代には日本各地で興行を重ねていたが、関東大震災直後の不穏な空気が漂う東京近郊で、ある日行われた興行をギロチン社の若者たちが興味本位で観戦したことから、両者の接点が生まれることに。

遊び好きの性分の中濱は、元遊女で韓国人の十勝川たまえ（韓英恵）の過酷な生い立ちを知ってその仲を深めていき、片や、ストイックな性格で女性には奥手の古田は花菊を知るにつれて、少しずつ惹かれていくことに。しかし、そもそもエロを目的とした、風俗を乱す醜悪な見世物であるとの認識が強い女相撲と、天皇陛下の下での一致団結を目指した日本国を転覆しようとする「主義者」の集まりであるギロチン社が接触しているとすれば、それは由々しきこと。官憲がそこに厳しい目を向けたのは当然だ。さあ、そんな激動する時代の中、若きアナキストである中濱鐵と古田大次郎、そして、若き女相撲の闘士である花菊と十勝川たちの生きざまは・・・。

## ■□■関東大震災と聞けば大杉栄、甘粕正彦だが、本作では？■□■

1910（明治43）年に起きた「大逆事件」と聞けば、すぐに幸徳秋水と結びつく。この事件は、天皇暗殺を企てたという冤罪で幸徳秋水、管野すがらの社会主義者、無政府主義者26名が逮捕されたもの、翌年には12名が死刑執行されている。

他方、1923（大正12）年9月1日に発生した関東大震災は広範囲にわたって未曾有の被害を引き起こしたが、震災被害のみならず、①朝鮮人が放火し、暴れているという流言の流布、拡散、②自警団による集団暴行事件、そして、③陸軍の一部では、震災後の混乱に乗じて社会主義や自由主義の指導者を殺害しようとする動きも登場した。そのため、関東大震災と聞けばすぐに結びつくのが、第1に、それを契機とした朝鮮人の弾圧と虐殺、第2に、憲兵大尉甘粕正彦らによる、大杉栄、伊藤野枝らの虐殺だ。これは「大杉事件」別名「甘粕事件」とも呼ばれる。前者は、『朴烈 植民地からのアナキスト』（17年）で強烈に描かれていたし、後者は、吉田喜重監督の『エロス+虐殺』（70年）等の映画で詳細に描かれていた。

また、私のライフワークである都市問題の領域では、関東大震災と聞けば、「後藤新平の大風呂敷」による震災復興の模索が興味深いし、荒俣宏の小説「帝都物語」の大震災（カタストロフィ）篇では、関東大震災の混乱の中で暗躍する、魔人加藤保憲の大活躍が興味深く描かれていた。

それに対して、本作ではまず関東大震災と女相撲を結びつけなければならない。5月13日から28日まで開かれている大相撲夏場所では、関脇・栃ノ心が快進撃を続け、大関昇進を確実にしているが、その力強い取り口は既に大関を越えて横綱級！それを連日テレビで見ているだけに、本作冒頭に登場する大関・梅の里つね（前原麻希）や、小結・小天竜よし（持田加奈子）らの女相撲の力戦を見ても私にはイマイチ。それでも、観客はその熱戦にやんやんやの喝采を送っていたが、関東大震災で地面が揺れ始めると・・・。

## ■ギロチン社の勉強は「あの超異色作」と共に！■

本作のパンフレットには、女相撲について、①亀井好恵氏（民俗学者）の「女相撲興行の歴史」と②遠藤泰夫氏の「私の母は女大関・若緑」があり、ギロチン社については、栗原康氏（政治学者 アナキズム研究）の「ギロチン社解説」があるので、この3つは必読。また、「菊とギロチン年表」があるので、これも歴史上の勉強をするためには必読だ。

他方、資料を読み込むよりは映画を見た方が早いという人に絶対お薦めしたい映画が、山田勇男監督の『シュトルム・ウント・ドランクツ』（13年）（『シネマ33』241頁）。誰でも、そのタイトルは一体ナニ？と思うはずだが、これは、「疾風怒濤」と訳されるもの。「疾風怒濤」とは、18世紀後半、ドイツに起こった若いゲーテを中心とする革新的文学運動で、理性中心の啓蒙主義に反対し、自然・感情・天才を重んじたクリンガーの劇の題名に由来するものだ。そんなタイトルからは、ゲーテの『若きウェルテルの悩み』のような文学作を連想するが、実は同作は、ギロチン社に結集するアナキストたちの青春群像劇だ。

もっとも、私はそこで、「本作に観る若きアナキストたちのテロの実行ぶりを見ていると、いかにもヘマばかり。アナキストとしてテロの実行に命を懸けるのなら、武術はもとより、刀剣の扱い、拳銃の扱い、爆発物の扱い等をしっかり訓練すべきだが、本作を観ているとヘマ続きだから、ついイライラしてくる。」と書いた。また、「テロの実行行為を描くが、きちんと成功した例は1つもない。カッコ良く(?)成功したのは、今でいう総会屋まがいの恐喝で大金(小金?)を巻き上げ、みんなですき焼きを食べる資金にしたものだけだ。短刀を持って突進しても途中で逮捕されたり、ぶっ放したピストルが空だったり、投げつけた爆発物が不発だったり、部屋の中で爆発しても人が誰もいなかったり、とにかくやることなすことがドジばかりだ。」とも書いた。

それは、本作も同じだ。すなわち、中濱と古田が慕っていたアナキストの大杉栄が憲兵隊の甘粕正彦に虐殺されてしまったため、そのかたき討ちとして、甘粕の弟を襲撃したが失敗。また、資金集めのために、古田が銀行強盗をするも失敗。これでギロチン社のほとんどが逮捕され、中濱と古田は逃げて朝鮮に渡り、爆弾入手を図ったが、金が足りないため、中濱は大阪に戻って、再び掠奪をやるも失敗し逮捕された。その後、古田は自力で爆弾を作り、大杉の仲間たちと共にかたき討ちをやるが、これも失敗。しばらくして逮捕され、2人とも裁判にかけられ、処刑されてしまうという始末だ。本作には、中濱

と古田の他、倉地啓司（荒巻全紀）、田中勇之進（小林竜樹）、河合康左右（池田良）、小西次郎（小水たいが）、仲喜一（木村知貴）、内田源太郎（伊島空）、小川義雄（飯田芳）、茂野栄吉（東龍之介）等のアナキストが登場するが、そのドジさ加減にはいい加減うんざり・・・。

## ■□■夢は「強くなりたい」「社会を変えたい」だが・・・？■□■

冒頭、横暴な暴力亭主のもとを逃げ出してきた花菊が、女相撲を食い入るように見つめるシーンが登場するが、そこで彼女の心の中に満ち満ちてくるのが「強くなりたい！」の一念。そのため、花菊は女相撲玉岩興行に参加するわけだが、その夢はなぜ生まれたの？それをどう育てていくの？そして、それは実現できるの？それが3時間09分の長尺となった本作の1つのテーマだ。

他方、「ギロチン社」に結集するアナキストたちの議論は活発だし、リヤク（略奪）で見せる手口はそれなりのものだが、前述の通り、彼らのテロ行為はへまばかりだ。本作の主役となる中濱は、詩人だけに過激な文章の作り方としゃべりの達者さは立派なものだが、具体的な行動になると一歩引いている感じ・・・。また、佐藤浩市の息子である寛一郎が演じている古田はいつもハカマ姿で、書生さんの雰囲気だが、眼鏡をかけた風貌の通り、その言動は繊細そのもの。どうやら、花菊に一目ボレしたようだが、もちろんその「告白」というしゃれたことはムリ。後半には爆弾魔となって革命のために尽くそうとするが、爆弾の威力を見せつける相手が花菊を迎えにきた亭主の定生になるのは何とも皮肉だ。

本作の半分は『シュトルム・ウント・ドランクッ』と同じようなギロチン社の面々の青春群像劇になっているが、その若き主人公である中濱と古田の夢は「社会を変えたい」というもの。しかし、その夢はなぜ生まれたの？それをどう育てていくの？そして、それは実現できるの？それが本作のもう1つのテーマになるが、このザマ（体たらく）では、とてもとても・・・？

## ■□■女相撲vs警察、在郷軍人分会、自警団■□■

70年以上平和憲法に守られ、「いずも」型護衛艦を、垂直に離発着できる米海兵隊の「F35B」戦闘機が発着できる空母に改修することが「専守防衛」の大義に反するか否かという議論をしている今の日本には、自衛隊はあっても軍隊は存在しない。したがって、在郷軍人会も、自警団も存在しない。しかし、本作を見ていると、風紀紊乱の恐れのある女相撲を監視する役割は、警察のみならず在郷軍人会や自警団も自発的に担っていたことがよくわかる。明治・大正時代の警察は「おいこら警察」と呼ばれており、他方では政治集会等では「弁士中止！」の切り札をどの場面で切るかが1つの仕事だった。それが本作を見ているとよく実感できる。

他方、寺島しのぶが文字通り「裸の演技」で第60回ベルリン国際映画祭銀熊賞（最優

秀女優賞)を受賞した『キャタピラー』(10年)、『シネマ 25』215頁)で、4本の手足を失ったうえ耳も聞こえず目も見えない状態で故郷に戻ってきたけれども、性欲だけは人一倍旺盛な「軍神サマ」を迫真の演技で演じた俳優・大西信満が、本作では常に軍服に身を包み、在郷軍人分会長として部下を厳しく指導する飯岡大吾郎役で登場する。在郷軍人分会はシベリアや第一次世界大戦などの帰還兵から構成される組織で、国家の自警を目的とし、その多くは元は農民だった。この飯岡は強烈な反共・反朝鮮の思想の持ち主で、女相撲とギロチン社を警戒していた。もっとも、その部下である佐吉(川本三吉)、キチジ(高野春樹)、栄太(中西謙吾)の3人は強い思想などは持たず、隠れて女相撲を観戦したり窃盗を働いたりするなど、規律に反した行動が多い困り者だが、私の目にはこの3人の方が人間味と親しみが・・・。

また、テキヤ系のヤクザで土地の歩方の坂田勘太郎(川瀬陽太)や、元豪農の地主で女相撲が好きな田中半兵衛(嶋田久作)等の興行主は、雨乞い等の「神事」のために女相撲を招いていたようだが、相撲の取組の中でオッパイがポロリとでもなると、たちまち「興行中止!」となるから、玉岩興行の親方である岩木の心配りは大変なものだ。

現在の大相撲は、公益財団法人日本相撲協会が運営している上、「国技」と認められているからその経営・運営は安泰だが、1963(昭和38)年に残った平井女相撲が廃業したことによって、明治時代から続いた興行女相撲は終焉してしまった。女相撲の興行が1923年の関東大震災前後でいかに大変だったかは、本作における女相撲vs警察、在郷軍人分会、自警団のせめぎ合いを見ているとよくわかる。もっとも、本作を観ても私はやはり女相撲よりは女子プロレスの方が面白いし、女子の柔道やレスリングの方が面白く、女相撲はイマイチ料金を払って観戦する気にはなれなかったが・・・。

## ■□なぜ瀬々敬久監督が本作を?今を生きる若者達の夢は?■□

瀬々敬久(ぜぜたかひさ)監督は『64 —ロクヨン— 前編』(16年)、『64 —ロクヨン— 後編』(16年)の大ヒットでチョー有名になったし、『感染列島』(09年)、『シネマ 22』未掲載)等の商業映画を作ってきたが、他方で4時間38分の長編異色作『ヘヴンズ ストーリー』(10年)、『シネマ 25』187頁)等のインディーズ映画でも有名な監督だ。その瀬々監督がなぜ、女相撲のヒロイン達とギロチン社に結集する若者達の「夢」に焦点を当てた本作を監督したの?それは、本作のチラシに書かれている次の文章を読めばよくわかる。すなわち、

十代の頃、自主映画や当時登場したばかりの若い監督たちが世界を新しく変えていくのだと思い、映画を志した。ぼく自身が『ギロチン社』的だった。

数十年経ち、そうはならなかった現実を前にもう一度『自主自立』『自由』という、お題目を立てて映画を作りたいかった。今作らなければ、そう思った。

映画は多くの支援があったからこそ完成できた。何かを変えたいと映画を志した若い頃、自分はこういう映画を作りたいかったのだと初めて思えた。あとはいざ、世界の風穴へ。そうなれば本望だ。

また、本作のプレスシートの「プロダクションノート」には、「80年代に始まる映画化の夢が、震災を経て、いよいよ実現へ」という小見出しで、瀬々監督の夢が実現した過程を次のとおり紹介している。すなわち、

『菊一輪ギロチンの上に微笑みし 黒き香りを遥かに偲ぶ』

古田大二郎が死刑に処された折、獄にいた中浜哲が追悼に送った句だ。1980年代の中頃、助監督時代に、この句を知り『ギロチン社』についての映画を夢想。社会を変えようと、たとえやり方は過激であり滑稽に見えさせても国家に死をもって処された若者の姿を描きたかった。

このように、瀬々監督の夢は実現したが、本作の主人公である中濱や古田、花菊や十勝川たちの夢ははかなく消えてしまった。それは、あの時代だったから仕方ないの・・・？しかし、中濱の「やるなら今しかない いつだって、今しかないんだよ」、古田の「バカヤロー！女一人、助けられなくて何が革命だ！」のセリフ、さらに花菊の「おらあ、強くなりてえ おらあ、相撲やりてえええ！」等のセリフを、平和で安全な今を生きる日本の若者たちはどう聞くの？そして、あなたの夢は？と聞かれた時、彼らはどう答えるの？

米国大リーグで予想以上の大活躍を続けている大谷翔平、15歳9カ月という史上最年少で七段への昇段を決めた藤井聡太など、一部の天才ともいえる若者は着々と自分の夢を実現させているが、さてあなたは・・・？また、あなたは・・・？あなたの夢は何ですか・・・？自分の夢をそれなりに実現させながら今を生活している69歳の私は、それをあなたに聞きたいと思っているが・・・。

2018（平成30）年5月25日記